

## 幼児むぎの繪のこころ

——紙芝居の挿畫などに對する一つのながひ——

### 齋藤善太郎

幼児の紙芝居のことを指導してゐられる先生が、その御指導の下にかいた或る保育科生の紙芝居の繪を見せて下さつた。私は——素人のくせナマイキながら、そんな反省をする暇も無く——「固いですネ」と直ぐ言ひ放してしまつたのでした。これは確かに差評で、そんな亂暴な評をしてはならぬのであることを、其の先生の諒々と話して下さる保育と紙芝居の關係、したがつて紙芝居に使ふ繪のどうして固いまゝ——マア概念的でも云ひませうか——でなければ保育上のさしあたりの用を足さないかなどからすれば、私としても肯かれはしましたし、今も十分其の先生の云はれるところを肯定してはありますが、併しなほ納得のいかない何ものかゞ残ることは残るのでした。

○ その前でしたか後でしたかは忘れま

が、とにかく略く同じ頃、私は友人とこの子供の——幼稚園に行つてゐて一等小さい組にゐる女の子の——描いた「電車」の繪をみせられたのでした。繪といふよりは素描で、紅いクレヨンで描いた、電車だといふ

其の素描は、「コレ、テンシャ」と云はれなければ分らんほどの、ホールとか、車體とか、窓とか、車輪とかなどはむしろ整つてはるないものながら、私は「あゝ、電車ですネ、いゝ電車だね」とツイ云はせられてしまつたのでした。といひますのは、子供がちやうど立つてゐて、停留場などでハッキリ對象としての電車が自分の前に迫つて来たときにクツと受けたらしい感じ——その胴體の所、よく市なら市のマークのはいつてゐる。そして稍々ふくれ氣味の、廣い感じのする。そして少し埃など浴びて薄曇つてゐる面の感じ——少くとも然ういふもの對象としてのテンシャが、そこに實に生

きく／＼と描き出されてゐたからでありませう。そして其の幼児の作品と、さうした感受をするものと大體において云へる園児などに見せる紙芝居の繪とを、なんどか正しくまた麗はしくつなぐことが出来ないものかしら、といふ願ひが——然うです。私にとつては第三者の願ひであります——私をしていつも幼児向きものゝ繪に對する割り切れなさをツイ持たしてゐることになつてゐるのであります。

○ 其の先生から生徒の作品なる其の紙芝居の繪をみせられた時も、かうした「願ひ」、若しくは「割り切れなさ」が、ナマイキにも私をして「固いですネ」と暴言をウツカリ吐かしてしまつたのでした。そして其の時もたま／＼側の机の上に參考にもと列べてあつた新しい國民學校の教科書の方に行つて、其の中の挿畫を其の先生にもお見せしながら、このごろどんなに美しく挿畫がなりつゝあるかなどを話しあつたのでしたが——少くとも此頃の正に藝術家達の勞作になれるといふ挿畫は、私の願ひを聞きとめて、くくれるやうに思はれて、第三者的、

父兄的にはまことに嬉しく感謝さるゝのであります。

さうしてゐるやさき適々私はひそかに尊敬してゐる兒嶋喜久雄先生の「希臘の缺」といふ本を秋日のあたる午後の窓で讀んで、そこに「寫實」の事が、論ぜられてゐる所を見て(その本の八二頁以下、「寫實主義に就いて」)、「ウン、これ〱、兒嶋氏も言つてをられる。權威者が解いて、くれるではないか」といふ、傍證をしてみたらやうな悦びで、これを書きかけてみたのでした。

○ 紙芝居はたしかに現實的な繪でなければならんでせう。殊に生活指導に眼目を置いた場合のものなど。しかし——覺書みたいなものを並べることをお容し下さい——願ひとしては、一、幼兒なら幼兒の感受性に即する現實性を持たして欲しいし、二、まだ未分化な幼兒に對してであるから折角美しいものを使ふなら本當に美しいものであつて欲しいなあとは思ふのであります。

兒嶋先生は言はれます、

「我々は日常夢の世界や空想の世界に遊んでゐるわけではない。また瞬間的印象に即して生きてゐるでもない。さればと言つて抽象的な概念の世界に生きてゐるでもない。」

殊に幼兒は決して〱、「抽象的な概念の世界」のみには生きてゐないと思ひます。そして大人も然うであるが幼兒は殊に、

兒嶋先生も言はれるやうに  
「五官は御承知の通り視、聽、觸、嗅、味、の五感覺であります、我々はそのうちで先づ視覺を通じていろ〱のものを知る。又、觸覺の體驗が視覺の體驗と結びついて、眼で見ただけで、色や形のみならず質を知つたり、遠近の關係、厚み、深さなどをすることも出来ます。(傍點は引用者のもの)といふやうにして、現實のつかみ方、對象をものとして現に捉へてゐる其の仕方は、固い挿畫——概念的抽象的説明のみに終つてゐるやうなものとは——とは稍く距りがあるやうに思はれてならないのです。「現實的説明的」でないといふ兒に分らない」といふ意見も、これも實際から來てゐる現實のことなどではあるが、

しかしさきの固い繪のやうなのを見ると、そこにモウ一步進めなければならん現實への方が有るやうに思はれてならないのであります。

之は取除けの場合かも知れませんが、兒嶋先生によりますと、

「初期の繪畫の素描を見ますと、眼はいつでも正面からうつし、鼻はきまつて側面からかくといふ事になつてゐます。之れは最も強い印象の記憶に基いて描いてゐるからであります。……プリミティブな時代の人々は自分達の生活に近いものばかり描いてゐます。スペインのアルタミラや佛蘭西のフォンドゴムの壁に描かれた動物繪を見ると、原始時代の人の描いたものは中々實寫的であり、す。彼等は狩獵をして動物を食物として生活してゐたので、彼等の關心は常に動物の相や狩獵の光景などにあつたらしい。そしてそれが彼等の記憶に一番ハッキリ刻みこまれてゐたのであります。背景などはなしに動物の姿態だけ描いてゐる。あれは恐ろしくまく描き出してゐる。然しあれは例外でそれからすつと

後、一般に寫生といふ事が始まつてから初めて正確に現實界の相を完全に描き出すことができるやうになつて來るのであります。

とあります。幼兒の繪は幼兒の繪なりに「實寫的」であること、しかし「正確に現實界の相を完全に描き出す」のは後であること、だが併し幼兒なりには其の作品は相當寫實的實寫的なものであること、そして然ういふ作品を描くやうな感受を持つものとしての幼兒向きの繪などの指導上の心得などについて、多くの教示を此の兒嶋先生の一節から受け得るやうに思はれます。しかも其の「プリミティブな人たち」の繪が、「あれは恐ろしく、ま、描き出してある」と他ならぬ兒嶋先生が言つてゐられるところからすると、さらに此の一節は、私達に、私のいはゆる「本當に美しいもの」、藝術的にも麗はしいものを使つてもらひたい。といふ念願へ、強い教示をして下さるやうに思はれるのであります。

○  
覺え書きみたいなのが餘り長くなりま  
すからモウうちきるとしまして、勝手に兒

嶋先生の言葉をおかりすることにしますが

「藝術上の表現の目的とするところは吾が自然の觀照に即して、感じる感情の表現であります。繪畫は決して標本圖のやうなものではありません。」(感情と○印をつけた所は原文のまゝです。)

願はくば幼兒の觀照にも即し得るやうなその意味で幼兒にとつてもまた麗はしくあるやうな、そんな紙芝居の繪がほしいなあと念願されてならぬのであります。こゝにナマイキな言ひ分ではありませんが、

幼兒の感受性に即する現實性を持つてはゐるが——固く、干からびて、平板で、文字を線と色に直したやうなものではないところの、

そしてまた未分化な幼兒に對してあるから本當に美しいものであつて——さらばといつて夢みたくない幻的なものではないところの、

即ち、「正しく」且つ「麗はしい」ところのものが、與へられる道が有るのではないかと思はれるのであります。(一個の素人の念願として、)

## 幼稚園を耕しませう

幼稚園の園は子ども成長の教育園ですが、そこには野菜園の餘地はありませぬか。舗裝地の都會幼稚園は別として、一般には種子の蔭ける土の面積がある筈です。幼兒の潤達に遊べるだけは殘して置いて、少しの空地でも、それ／＼場所に即して小農園にしたいものです。殊に従來の花壇は、そのまゝ小農園にかへられるべきです。大きな菜葉の縁。小さいながら白や黄の野菜の花、やつぱり立派な美觀であります。

保姆さん方は、趣味的な園藝の知識ほごに、實用的な農耕の知識をもつてゐられるでせうか。今までどうであつても、これからでも研究しなければなりません。それに、園藝用の小さいシヤベルは器用に使へても、重い鍬がしつかり使へますか。又、手ぎれいな水撒きよりは少々ポンと來る肥料の扱ひに慣れておますか。——たゞに増産問題、食糧問題としての外に、教育問題として是非おすすめます。戦時保育の一場面として。(く)